拾萃集

へ 4
4686

梅葉集　春

継塵庵長宣

昭和十六年三月五日 寄贈 石澤介吉氏

立春
山里はかすみ計ぞしるしなる今朝春立とたれかしらまし

谷江早春
谷の戸は今朝のあら海なれども春の光に浪ぞ立らし

初春霞
水ぬるむ野沢の水の春風のふきにし日より春やたつらん

餘寒
春たちて日数へぬれど鳴鶯や霞にかすむ山の端もなし

春月霞
おりたちて今たち隔ぬる鮎すむ淀によるの月かげ

野外霞
旅人のゆくへはいとゞかすみけり野の原も見えて

霞隔行舟
西に行まゝに遠ざかり霞の浦にこぎ行舟

田家鶯
さよ梓のうちはかすみて鶯の声

雨中鶯
おりたちて初音ぞ鶯の小倉の山の谷にこそすむ

春雨は音もせぬ窓の竹の葉にうつるや鶯の声

山家鶯
山里は世に住うくも鶯の声ぞ谷の庵

寄人新年語
まちまちし春の立る今日ハ[illegible]白へは

田家若菜
かりそめし小田の[illegible]若菜ハまたき[illegible]

山路雪
[illegible]見えや八[illegible]の山風にふく

野外残雪
富士の根[illegible]

帰雁兼月
[illegible]月[illegible]

二月余寒
[illegible]の[illegible]風

梅久盛
[illegible]風の[illegible]ぬ梅の[illegible]

梅香何方
梅の香[illegible]風[illegible]

山路梅花
[illegible]の[illegible]梅[illegible]の[illegible]梅

梅香留袖
[illegible]

柳
[illegible]の[illegible]老[illegible]の[illegible]柳の[illegible]

柳先春緑
[illegible]柳のいと

柳随風
[illegible]の[illegible]風や[illegible]

風生楊柳色
[illegible]ぬ風も[illegible]柳の[illegible]

水草独縁
[illegible]の[illegible]の[illegible]

路春草
みち[illegible]

蕨
[illegible]の[illegible]

折蕨過友
[illegible]

春日見桜
[illegible]の[illegible]の[illegible]

春雨
[illegible]の[illegible]

海辺春雨
[illegible]の[illegible]

風前鶯
[illegible]風や人[illegible]の[illegible]

湖辺帰雁
[illegible]の[illegible]の[illegible]

帰雁幽
[illegible]一[illegible]の[illegible]の[illegible]

春雁雑々 世はなれて今かへるなやかさいふしてかはり一句ても有れ

野外雉 妻ことふ声かれ野の朝霞たつ〳〵とめて雉子なくなり

池辺花 なかきはるあかぬも花は影の露つゆをふくみて花さきやすらん

夕花 きのふまて入あひの鐘のきくとまるなる花のいろ深き哉

栽花 春の色をみやとひともしらすなる花のたねをむすふこゝろ

古今夕花 なにのゆふしとはなかれゆふへの花のしつけさ

落花 ちりてしも雪のこる花はまたなにをかきりにてや見む

河辺花 河ひ水の月やせの瀬の花の影とかはちりてさる

暁更落花 いつもかはらぬ花のかほりたえぬ暁の空

やよひ こし〳〵めつきかけしてのたきまくる庭林寺の春雪

み雨かりて這る 夜あけしろのきさらきの空もやちりぬる春のいろ惜しき

嵐山の花のまかりなるみちまても春かすみ人もなき

たをりしまこゝの花の花の影をつれ〳〵と見ひまなり

一枝はしもやなくさめとそなくしられは折りをそみて

はなのころしきみ

遅日 枝のうちとくるまゝに春なし何とかのなかつくまて

ともしはいまも今はまるゝなかきも今朝はまちかねて

花をともにめくるみとし行ひはいく夜かはりてそなき

野菫 うかれぬるも春まてしすゝみ摘て住みかの入逢の鐘

古郷菫菜 むかしの春をぬる海のすゝめの春さてまちなれ雉は

海邊躑躅 わすれのもとに海の上ゆけは浦をしはなさ入いまさくはなかれ

款冬雲繁 折のこやしかるこえて岸の花ひとつまるゝかけ

暮春躑躅 暮てゆく春をおしむ春はもいたぬまてもかすみのなけれはしめらん

芝山黄門より日向国宮崎郡

橘小戸神社奉納和歌題を請ひけるに詠て奉れる

若菜

ちる雪は雲とつれともはるの海もとめぬ人の若菜をそ見る

新年若菜

ゆく船はとしのはしめの川海のいつこ浅きも春の若菜

春新雨

春されはまたとみえし山ともるる雪もきえ冬の音

春灯

かくさねと宮このうちに有やまきに春の桜花咲灯のかけ

春鶯

桜花あかぬ心のまゝにおもひしられし入相のかね

春曙

さくらあてに見えしより里はかすみて春の山きはの花

夏

山首夏

春すきては夏のきぬさへ春の山の峯の白雲

竹亭夏来

窓ちかく一もとうへし呉竹の夏おひそむる風はふけり

卯花似月

空はまた夕月なかき夜の気色にも見る庭の卯の花

垣根卯花

卯花はあかぬ光しきて見えし垣ねは雪さえ月かけ

月影のうつらぬ垣ねもやかかる卯花さくなる垣ねもかけり

卯花咲よる里のかきねかけて一枝をおりてとひ来れは

わかしらみてもおもせし

山との葉の峯をきしきて枝をりかへはあをやの声と夜をまち

郭公

ひとこゑきてとなりの宿はたれまつ声をきくらむ庵の卯花

人言のゆふすみと郭公卯月きぬるはまさぬのは

ねさめのよるにまちわひ声をきくならはねてまつ夕山の端

いくこゑを語りしもそ郭公ねさめきく夜のなかきとおもふけれ

まちわひて過てきけるほときす夜はふけ月の出をまつの声

きこえよさつきやまたつのなくものをしきに声をひとつも一声

京にありし比ある人ひえの山のほとゝぎす聞にとて
ほとゝぎすを尋むとてまだよりいさなはれ行けるに
何事にかありけむ此人なりてありとも至へ帰り
ぬれば我一人夜もすがら待けれどもむなしく帰りて
暁の時鳥待て
　ある人は陰ありけん我は夢に現なきかなふ郭公ぞまた
卯月の比浄花山院にて
　郭公かかいてまちけれども山卯月はまだのか鳴ぬらしきもし
人情郭公　郭公声もひまなし聞けると人のかたらふ初音卅八
暁月夕郭公　ほとゝぎす待とて待つ夜涼しきのあり明の月に郭公そなき
待客夕郭公　来る人もまうでてきみもまた郭公なけいふらん今宵一声
独夜時鳥　語るらむ友こそあれと一声も今宵ひとりや聞む山ほとゝぎす

雨後郭公　卯月雨晴て鳴をききて夜の声のまゝかいでゝ聞
卯月郭公　ほとゝぎす今ではこれにいさとなむくれしきなふの時鳥
闇中郭公　独まひをまの君は郭公夜をかけて鳴音哉
夕郭公　郭公かくいふ外は友もなし山ちかき本のしら露
郭公遍　山深き人のきけと鳴音かなところきみ深き
浦郭公　一声も浪のあわいの山ほとゝぎす
早苗　早苗取る田子の袖にも露ぞ置く
早苗交路　いそぐらん門田に早苗とる道の
端午　今日こそはかけし菖蒲の世の中
江中菖蒲　水にもとめよ江の中の菖蒲のあやめ
閑居橋　白妙の袖のかよひ路庵の松風

五月雨
せき入ぬ庭まての[illegible]のつたへかけて猶見る五月雨の比

枕上五月雨
五月雨のふりにし袖ハぬれまさる宿の軒端の千枝の葉

湖上五月雨
さみたれは[illegible]もいつとなくむの浮[illegible]るかの湖つゝを

古宅五月雨
五月雨に人めハかれてあれし宿の[illegible]

湖水鶏
うきねして都にかよふ夢の道ハ水鶏たゝくし声そ[illegible]

夏月
月影ハ霜とみえて夜半のねや[illegible]似頃明[illegible]

雨後夏月
むら雨ハもらし涼しき宵の[illegible]御の夜の月かけ

風前夏草
風そよく夜半の草葉[illegible]秋の声きく[illegible]

野夏草
刈わたすかきの[illegible]秋のそらにてしる

鵜川篝火
五月雨ハのぬるなも河つらとてや鵜舟のかゝり火の影

夕雨鵜川
いつしかと[illegible]夏の川瀬さへ[illegible]の舟さしぬ[illegible]

いく夕[illegible]かけても[illegible]川のち[illegible]鵜舟こきゆく

山家暁蛍
見蛍世にまよひし[illegible]暁かけて[illegible]

蛍過窓
みすしもいかゝぬ窓に[illegible]

蓮蛍似露
[illegible]

水辺蛍
千[illegible]あさ[illegible]のみ[illegible]やて[illegible]

蚊遣火
いく夜か煙たてゝる軒の夏のと[illegible]

隣蚊遣火
夏の[illegible]涼しさ[illegible]

氷室涼
[illegible]氷室山[illegible]

夕立雲
[illegible]夕立の[illegible]

夕立風
[illegible]夕立[illegible]

山夕立
[illegible]この山[illegible]夕立[illegible]涼しき

遠山夕立
夕ぐらの[illegible]のほる[illegible]やまの[illegible]

蝉夜深
声ハかり[illegible]

夕納涼
涼しさや[illegible]蝉の声

依月夜涼
涼しさと[illegible]

夕納涼
夏の夜は[illegible]

松下納涼
[illegible]

谷水夏猿
[illegible]秋の[illegible]

瀑布秋接
大井川[illegible]

蓮池飲
[illegible]

夏庭
[illegible]の[illegible]水せき入[illegible]の涼しさ

秋

田初秋
[illegible]秋の[illegible]

兼待七夕
[illegible]

七夕言恋
星合[illegible]

七夕鳥
[illegible]

七夕枕
けふ[illegible]

七夕扇
七夕は秋の[illegible]

夕荻
入あひの[illegible]荻の[illegible]

江荻
風[illegible]

古江荻
[illegible]

庭上草
[illegible]秋の[illegible]

古江露
[illegible]秋は井手の[illegible]

庭草露滋　秋まくき行くろ庭くたろ宮の白すしたる美の主書に

虫声滋　今宵来ハんのあさち原あさ夜は涼き虫のなく声哉

月前虫　鳴ひしのあかりハ月ぬあさち原照月かけハ露と見へても

野虫　ときた野ろえハそれも猪虫の秋の庭近ふ声や鳴

虫声近枕　秋ききちろこ露う人行ハぬ枕より声かさハしや虫のなくらん

野径秋風　秋風の身にしむ時ハ海かけぬ野径の虫露の涙やこほるらん

山家　蔭くらぬ松のひ先にし事も月と枕の山に家ハなけれも

野家　思ひ火やうちあらしける柴の家ハたくひ行て住まふらん

野外家　あはれ今住まれむ草の枕の尾花かもとに家をかすらん

揺月出家　萩の葉の草枕の夜さ袖にも人ハそこ上月きこえ行く

秋夕　ひとり海と秋ハうかりし夕暮を望てやすらむ人や眺らん

海辺秋夕　船人の秋の出せハつまき浪の涙の分けまとも誰やぬれ衣

深山秋月　秋さむき松の下ほそくも木を照く人よりまた七月を滿くるを

見月　妻かる月のかりて我身をそやもしふへしちるらんともなく

月似雪　こゑよし神うちさふ雪ことも佐野のわたりの海の月影

山月入簾　山風よことに吹あらし新玉の月の光のみすにこゝろめ

野月　武蔵野ハ入るしらぬ月なれハ草よりいつる月ハ光

海辺月　打の根の煙ハ浦ゝに添の海の浪路よりいつる月を白妙

湖上月　諏訪のうみや秋の氷のかよひちハあらさんかりて月を見

草亭暁月　高瀬の草葉の露をひとりまつかのしるしのみよそ月影

雁　なかはまた雲ハうけ行ま草の枕の袂に秋さ下や行きこし

山家初雁　山深きとみ山里の下にも鶏の軒端ハいとゝひてやこし

海辺雁　塩釜の浦の舟の夕霧に鳴渡ていつ秋の雁

羇樵丁　かさねきる袖しもしほたれつゝもいやしき袖に石のまくら

関路暁霧　暁は出行人の川やせき路をこゆる霧に帰かたふ

河上霧　志らたしも秋霧晴まも出て河水ハありとも

河旁秋萩　みなせ川浪ハあれとも秋萩に風の関も恨む秋萩

海辺秋萩　夕まくれ芦火たく屋も霧こめて明やらぬ磯浪の露

擣衣　いとゝまた夜ふけの月の山里ハ秋をもきく擣衣の声まきて

河辺擣衣　擣衣の音をよしの川なみのたちの川風さよふきぬと

遠村擣衣　三輪の山松のをちかたしてや枝のあしたの衣うつ声

秋初雨　秋かせすましき露ておきいて空さへ晴ぬちるけしき

草野月　草のまやの草の葉に花ひらく露ちる月のかけ

草露　草の葉に降みをく月影やする露やみたれん

山路草　咲草の露をめてゝこゝきふしたちのほりぬる山路なりき

秋色草　幾秋かむかしの跡をとふらんこの山陰の草むしろかな

蔦　うつの山みちなれしも秋ハたつ蔦の紅葉

山中紅葉　山人のかよふ空もみえぬ紅葉も山をみちを

杜紅葉　なほあきの杜も秋ハ錦とみえて紅葉をまつも色ふかし

深紅葉　みそあらぬ谷の紅葉のまつもあまたもみちそあれ

紅葉深色　あるしてらも紅葉にいろ深き中をねとて色をそへ

萩秋風　萩の葉にそよきえぬもの秋の時雨をさそふ風のけしき

羇中暮秋　旅いてゝ日数経し旅をかさねてはの山路は秋なりけり

冬

杜初冬　ちるとなき萩の杜にしのふ木の葉をさへ冬ハきぬらし

時雨雲　志くれしも時雨て二方山も今ハ冬ハ冬ハ初時雨雲

夕暮時雨　一村残り出さへうきと入る夕日の外ちれかなしさ

夜時雨
行路時雨
閑時雨
雲間落葉
落葉如雨
夕落葉
谷落葉
路落葉
落葉埋山路
窓落葉

おとろへの身にうちそふる時雨かなしくれ行そらに袖はぬれつゝ
世にふるは苦しき物の山路ゆく雲間の時雨そ袖ぬらしける
小萩しくれゆく夜ともなく音たてゝ閑の軒ふる時雨もさひし
いつしかとさためなき世の時雨哉雲間に落葉ちるかとそ見る
踏しだくまにしゝうしてそれもみぬ木葉そ雨とふる紅葉
ちりくのあめの世ちりて木葉とそ晴るゝも時雨やふる
高嶺より吹おろす風に落葉ふり夕日さゆる峰の
入逢の声きく谷の木の葉ふみ分て岸のあらし
いつくの里をかとひこたへ谷のもみちはちりつゝ
松ちりし山路の木葉をもふみわけて人もかよはぬ
山深み分いるみちもうつもれぬ落葉ちりしく道そ
あつめつゝ窓にちるらん木の葉の窓の前につもる

残菊
暁霜
橋上霜
野田霜
草霜
寒樹交松
寒芦
沢辺寒芦
氷始結
千鳥
湊千鳥
池水鳥

みわ人の此秋ふかき色をも見て残る菊の花
踏分し朝のしもの道をやおきて霜の上にあとはかり
今朝みれは菊の花路かしもに今朝はしもおきにけり
山のはのあけ行空の霜白く見えて暁の山の霜
神よの名におふ橋の霜に見えてくれなゐの葉
落葉せし梢をのみとわきてそ松あをき木の風のさむさ
みきはくしもかれて芦の難波江のはの霜さえ枯
浦のしらなみのかけたる芦の葉に沢のあしの声さむし
玉箒のかけてくれぬる芦の葉の氷のかゝる
難波江の芦のうらかれて寒さにこほりのひまも
浪さゆる浦の千鳥の声ならし
鴨のゐる池の上にたつ千鳥かな

江の雪　しられえぬ中せぬ中も深き江　[illegible]あまの釣舟

夜の雪　[illegible]もいかにさして[illegible]

一夜過雪・寒氷　いその雨[illegible]しの山おろして[illegible]淋しき

雪中網代　うらしらぬ網代のかかりに[illegible]

網代寒し　しはしやいと[illegible]

山中霰　世にはいと深き峰の庵の霰[illegible]

初雪　[illegible]

[illegible]　[illegible]

山家初雪　山庵[illegible]

海辺雪　このみち[illegible]

松雪　風さえて雪[illegible]網代氷[illegible]

関路雪朝　[illegible]

行路雪　行路の[illegible]

暁雪　[illegible]

都雪　[illegible]

林中庵雪　[illegible]

社頭雪　[illegible]

山家雪朝　[illegible]

松雪　[illegible]

雪中眺望　山[illegible]

雪中旅行　[illegible]

冬河雪　富士の[illegible]中山[illegible]原

時雨中霰雪　一と[illegible]

庭雪日暮　[illegible]

野分後朝
炭竈煙
炉火
庭早梅
歳暮

新さむき風の吹けるみ冬の夜ふかきもわれてきさしもの
冬枯ころひの野ら露ほきさらは夜此さけみなとや思ふ
切られてハ常磐をみしもやうなき堀あさ氷ぬるとのこそ冷
能のたしうきあめぬ埋火の宮と告けみて箱しみ子よりる
思ひきふかき星をみる手向り冬と咲初の梅っえ
年毎に炉かて家られをき人のかりいまの例よりして
菊すみちら年いつ月この寒あるあめまる道と今とかせ
かけ流れきよし花とも此年此身まつのりなハの夜や深
老の梅こ南へいそれしいきぬとるまる年のくれけり

音楽あるをきひ奏しける年の名残と
又人は年いつも笛ふの世をまちかぬ此ハ如何なき

其とし待りける年の暮とよ

物思ふ人世のさためなきはせにて楽しきといふそこゑめし
天明五年といふもかしこき
其の頃ほかり有り嗣子従室昇進のよろこひ有ける
年此暮とよ
いなゝ身もたのしまるゝ何かたにへてかひ有る年のくれなるハ

冬苑雑曙
冬ノ鷺
冬ノ桐
冬ノ獣
冬ノ灯
冬ノ語

あをやと失なひぬる時の花なかりきハ其の初子すゑ此事
こゝろ根よ花気ふくむ冬ころ鶯の風にしる谷のいそ檜
とい花鈍るまてはゆりけり初冬たる桐の一葉ふると
冬枯てのこるもみちも少き山にあをりかけてやましら嶺
切さやうき浅のそこ走ま南ぬ秋さり道を炉の中
暮ま事も枕に冬すたかくのみ雪にまちぬ語の夜の友のまゝる

恋

忍恋
見恋
思書恋
聞名恋
不拝得恋
長契恋
絶恋
涙恋
疑先後恋
不逢恋
別後逢恋

おもひ寄ハ山はの関守よにもまさぬ音をのミなく
見る人ハかはしても流るゝ浦の入江のみるめなりけり
書れとかくをかしで人のそめし玉ハまことそれはすとくるも筆
人めのさかもうきそと思ひなれきてたもひさきの空の涙
とはぬ人ハ我こととしつるゝ顔の袖くきす影し
逢こともきみかれと契りぬ百敷のうのゝまの○ともかくハ
時をえていつ頼みあると見えむ事をうけて折ちきりけりや
あすしらぬ世を恋はいかに頼みきハ行末まてむきれなん
いつはりのなきせならねハ来りけて嘆かし人もいつて我まん
いつはりをみるさへつらき言の葉の海や百敷かさ情の涙もし
情なき関をし思ひ出しさも恋の袖も涙かくらぬや

忍待恋
夕待恋
遠程待恋
待契空恋
祈逢恋
稀逢恋
逢無実恋
欲別恋
急別恋
互惜別恋
後朝恋

心あまりて待さへ人をまたせしと頼めしさぬ宵をたのめし小夜
夕くれをたのめしまへのいつしかや又逢のまつきそめぬる
月にさへあかれてたのむしきかはにしぬとらへるによりてこぬ程はなきと
目にはしもまちていつまて契りのひるまぬ袖は涙のこるらん
乃ち見し行きもひとりあまり船のあすもや流れのはしのまくこと
我思ふもまた来ぬ夜の末とひつゝハもえ我や稀ととくる下紐
口とはゝぬ事あるにて命待しのうちものこそまさしき逢ぬる
偶ある人の情もかれしやえるはぬなけれあれこの我そ
鶏なれし嘆きを次にもいつしかとうちまちもせきるゝのまる
明あけれなきあはれぬ中にきし八重の事に一ふと恋そとふ
まちすくる朝そとこのとる又夜の月を知らぬと口つくろうき
名残はしくもかくいつはりに逢かくて逢らて知らん人の心に見え

影恋　世の人にさしもしらぬと山にかくれぬ枕あはてかくしなむ

星待恋　ほのかにて見えしは星の光とも待ち暮らす夜のほしもさえ

雲恋　雲の峰に立せしあとも絶え人の心のあらはにこそ

名立恋　逢ことは夢にさへこそ絶えにけりたちし名はなほ消えずして

恨恋　世を海のうらみはまさる身をしのびつつうきにはかなき袖ぞぬれ

旅恋　露まさる恋の山路にたびまていかにあはむこよひぞ

月前恋　うしや我そまて恋ける雲の月まちし人はいかでこぬ世に

待恋　むなしくてまつよは人のうらみいつまでも待ちし夜

春夜恋　ありしよの山の花にもにほふ人にたのまれしやせむ

夏恋　なきわれはいかにも結ぶ夏の夜の恋にやせる身をなりゆき

秋恋　まちし秋の暮の袖の露ぞぬれまさる夜半のかなしさ

　　　たのしきや秋の夜すがら虫の声のかなしさ中の絶えぬは

久恋　いつまでか人をまちつつありあけの月をみかねてくたびれしは

寄月恋　なかばき月のおもかげ人にこそあひみん夜の空はるかなる

寄風恋　あはれ荻の葉もさしくさきけ吹く風に人を恨みぬ

寄雲恋　まちや人こそ夜の山の峰の雲にぬれて夜を明かしぬ

寄山恋　かよひしと契りしを忘れしは世の山の根の枕にて

寄衣恋　ひとりぬる夜の袖の涙の色にしたるか人をうらみて

寄河恋　みをつくしてこそ恋ふる人の底の心ぞうき

寄海恋　あしひきの浪のあとに立ちても逢ふ海のかきこえば

寄海辺恋　洲にぬれし袖のうらみにまちのよを思ふ身をつくす

寄石清恋　えにしあらば身をよせてかの海浪のちりにもかはるらむ

寄石待恋　かはらでまつにはほのぼのしぬ世の末の石の上の恋

寄田逢恋　人をまつ代は田の面の稲葉そよぐ秋の夜の手枕

寄忍草恋　[illegible]

寄思草恋　[illegible]

寄水蓮恋　[illegible]

寄枕恋　[illegible]

寄鳥恋　[illegible]

寄麝恋　[illegible]

寄玉恋　[illegible]

寄衣恋　[illegible]

寄帯恋　[illegible]

寄笛恋　[illegible]

寄扇恋　[illegible]

寄船恋　[illegible]

寄筌貝恋　[illegible]

寄秋隠恋　[illegible]

寄傀儡恋　[illegible]

寄水車恋　[illegible]

寄名和布海恋　[illegible]

雑

天象

曙峯雲　[illegible]

雲浮波　[illegible]

老村煙戯　いつくにハさすらもなき煙もすむ人あれや老の山もと

夕立思　山の端の日影入ても星かそよかへる夕立の跡

地儀　春の遠里ハ波(?)へて見まかるあふさの花の色そ添(?)し

梅　何しれぬやあかぬ人にも梅の花ハかをれと見る

人不識　いつまでか見きれぬ人こそ名もなき我身の思ひの末

梅沢雨　見しれぬ人の沢辺の水(?)に此頃も我の木の本

梅香夜雨　やまとる里ハ人て月(?)の雨にいとゝハかくぬれしきぬ返しと

梅花夜雨　明るこよ人のくもちる梅の香の夜もすかてあそふ雨の梅さき

梅古女(?)面　あけかたきハかてるおぼろ(?)に何(?)の雲のうちやむ跡への梅の香にほふ

罌粟中燃　妹の新つくる中をやれくしりの梅の色そゝき

罌粟中燃(?)　隔こし我をもふるの山鳥のかゝる人のかくこと

　まれるきみの旧都へのかりて秋世月ちかくみちれく見ゆる

寄(?)旅　行旅人ハみちの笑まてよ見へる

　春の行ハ我はるか下(?)袖よりこそ露けき旧川の実

梅香暁月　暁の鐘まさるの花さく空(?)に月のなこり月影

梅花発　我人の花や咲かん松原こしの月に高(?)くもやさき

山家　住方ハみむもとふるもたかの里の山や世を捨る人

山家路　のかれきて山家ふる道ハあれにし世の人のかよふ路の末

山家月　老となる我の身の道を住(?)けぬ山の月の清きかなしき

山家戸　住捨ぬ世の人の戸をいつとなき人のたよりの門(?)

山家煙(?)　のかれにし住ハいつの山里も雪のぬる中の煙立ち

山家煙(?)　またとふ人も世をまち捨て住ぬ我のかつ煙立ぬ

山家燈　住よ世を捨て見ぬよの灯のかけ立へうすき山の住居

山路煙細　深山ある岩ほ(?)まかせて一筋の中の煙なかく見えし

田家　いつとなくうきこともしらす住なから門田の稲葉の風のひゞき

砌雲　流れゆくも猶うつるてふ雲のかけさえかはらぬ松の下陰

久年松　又たくひあらぬ千年をまつふるは名に高砂の尾上の松
いさといひしその言の葉を世にたてくちぬあふさかの松

関路鶏　ちかくぬる我か宿ちかき世の中に鳥のねそ聞ゆ大あさ

隣家鶏　君はたゝ咲やこの花庭とちて

古山居　むかし見し浦のけしきもかはらねと帰るさとの山

海眺望　舟人も帰るさそ見る遠こ海の浪の音の新やそ見て

独述懐　人しれぬ我世をうきのを我のみ心のうちとなりし思ひ

述懐非　我のみ世に憂ひかりのおもひにたへつる身の程もまさるへき

月催懐旧　なき人の影も見えたとまりし秋とやたえし月をむかひて

春懐旧　たらちめの恵みのあまりもしたるはきまつけても

世ハ昔に替る蝶の夢をよそにしむかしの花やこひしかん

夏懐旧　夏草の露きえてもなほかはらぬ人のしたふ心

秋懐旧　秋とはゞきし風のはおもわするやむかしみえてやめきて

うかりしむかしは秋と知れ世の夢はかなき袖は草の外かは

もとむ月のいとまたの人影をとふ姉君てあまし若竹て

冬懐旧　冬の雨を訓し昔にかへる身のおもひて思ひおかれ行ん

寄月無常　あさかりせしも我身よ月に人を驚し物は世はさてにめなき

寄露無常　萩の露にきえなてし人の世も今の露の消ぬことならぬは

寄夢無常　わきめの夢を流るゝはかなきに入てあたのまゆめそるゝ人をきさむ

母にをくれける人のもとへ

あはれ世にたのみしも頼みし秋の一葉にかゝる露のきえゆき

おなじく 二月四日追善 夕暮といふことを

詠めることしより我やかゝる世の夕暮に

息子におくれける人のもとへ

出萩ちる色の紅の露は言とはやおもひ出の

おなじく 父の十七回佛事いとなまれけるによみてこゝろのたけ

道だにもかはらしことをおもひいで詠て絶ぬしけり

友をうしなひし後にとはれたてる和哥の道の露

音楽院殿七回忌に

うちより追善の和歌奉りしに侍る扇の

老の袖も猶ぬらしけり七年にたへぬ涙もえよと

神祇

祝意 山桜の歌

天満宮八百五十年奉納和歌

頃とたれか八百とせを経しちはやぶる神のむしろを

御まても風と月との世にかけて神のこゝろ

そ汲人のこゝろにかなひけるめぐみの神のめぐみを

社頭

人丸大明神千年忌奉納二十首和歌 神祇

たえぬ道の末も今もしき島のなどか

曉神通
ひろき妙なる門に神通ときこゆる名も志らぬ　帳をも此をさら

隱離
この道のさえも隱離の人しかれや神山のふん

尊神說世
やと國の人を打ちやしふ辯なる無我神やまふん

秋教
きのえのあをかりし無き心しからも法施のちうひと

受秋教
あやとよ結まのこや海ととなの人ちとなさ法をかしこと

多秋教
むねうしもひろく蓮の花もなるきそう此池のされたてるかハ

ぬ足賊
生死の法のならまとにかくり旅たるみへし草まうの作とく

ぬ足鑑
かくてとんしも闇為也雲をはれもんハかさの月のさゆるき

殺生戒
多精の中に梅ハ咲まちてちつ法る春のえすしむあて

偸盗戒
雑の所も法を持法のまさ和花とかまふ四季や花を見

邪婬戒
多き上ハめつくされと書き事ハりまあ枝ハおとくのあき

妄語戒
うちむの歌ぬの枕まさたまへうかせの外ハ誠まうさん

飲酒戒
さりてしよとまひや浮世ハ世中にいとかりそめの旅にさそき
酔ひてうや人の誠なる事をも捨て無しとおもふ

引接結縁
楽の句を
我のこゝ人さへひて法のあまらか子ちるへの彰えかしこき

一心敬又佛不自惜身命の心ハ
兄にいやてあまた縁をも猿をもあふぬ山路たとえり行ことを
龍役のかさまりくらふれかりたここのみのりとときたてかし仰經為時
しれもののあわし父母なき世の法をかきつまつる我のたくま
とみてつらもしんなる

法の花おち姿し龍法にうけのあしの世をめくらと
あら人の教まりて菓の法ハ佛法寺にさ兼るまし法々
出まてりしよ心外無法満月まてゆ山といつる古祖師の法使さ

やすいわと世に語てとくうなる
沼志ヶ浦のうしへに神ならしたるのちは清きなかれと
雪のあしたに月の松茂の葉も赤ちるめ谷へてことぶきのら
たのしみのうえ茶牧とそらむしと聴してふみてそしける
名うむしる庭の名水そ今もみよ遊やおもし波

雑

中秋の月見むとて猿沢へゆかりける先勝も常にも庭にたる
名所き路ん事ぬきつて
菴ある中人ハおき世に父なし秋の月のこ添る猿沢の池
三河の武をききてまく国に八橋ときらりんとそのふ
作りける八
川やそふしもみや八橋此名をのこすよ失はるめる

神路山の名におふる吾妻山といふる所の西に昔人の住きし跡
ところふみんとうりけるに谷の方よりいとそ松ハさえるかな
我のうきありたまとゆる人なとよめる松かかきける
夕暮にはひ松ハ古ても枝ぬるの人のひとしと宴山寺とも
浪風あるまよのかりて都東山の方をさへて包成を
ひとりのこ庵にかくれ住うき月といふまがりえんし吾とはると
方へゆきけれ
危し
友かゆてよしやみるとも桜花こそこのところはなつかし
来る身ぶんのもろ新緑といふて雨後をそれしよ海山
をめてそ何しも懐旧の新緑ハ松かしなれ秋なりまし
とあらそれ故

かり寝の枕にはうらみぬと叩きて枕の詞とぞ見ゆ
卯花を形てぞくれし人のもとへ
忍び候えし人のきゝてもえなき君か旅にむとこそ見れ
郭公とふ草の花を見もりて
山の端は…と郭公もやとの名残のこゝろ
藤波よるの…る人此あ頃は浪寄へ海りもて秋に
とく草の末葉の露の…を…て
みそとくれ…は…し
露の身は…稲妻…のこゝろさき
山吹まもりて庭の…て
世のうさはぬ山にも…の袖もぬるゝや…の…
牡丹の…

かう人の…つるとて…にたとふることある
ことみちの…かきしるゝ
もみぢ葉のかざしはよきに舞人の袖ひるゝ…風は…
柳ころ…きたりに
春雨のあれ…のみちのゝて…もとぞぬ…の…
年の…たるして…に中あるゝ…かきたる…に
…の…に…せ…はあ…し…
…しの山…に南山…とい…眺望…
亞桐郷…は八宗の和…八宗の…
て人…よ…らるれし…て…
塩竈浦…訓…し…のうち
末松山…にあるぬ…花の…の…山

久我川森　久我川みなかみかけて月影も瀬々も淵とやなりぬらん
高瀬里森　あはれとも思ひやるべき高瀬にて秋萩分る杜の夕暮
十府浦　浦の名はとふにあらねど月影に入江の波のかかる夜半かな
阿武隈　舟人よ武隈あしたの浪の河風さむみふくあしの葉
南山関　有明の南の山にいくよ人の里は雨に海もなるらん
松蔭露　ちりかかる松の下葉の露ながらおりなる鶴もいくよ世の人

芳野紀行
身の後の事を思ひ、年月の移りゆくを惜しと
世の中をあさましく思ひて、年月もなくして十日あまり
よみに都をいでて、わがすむ山路も定まらず
きのふけふの日はうちの里に宿りぬ、けふそこの寺に
おりしも花の盛りなるに、山路の花を見て、咲て
いまだ散らぬ花のあやなきを、いざと見て、散らぬ間にと
世をうらみ里をいとしく、道のほとりに山路の花の宿りの
それはあやしき心地して、花の咲くを見るにつけて
まことに山路に、鶯の一枝、瓶の蘭の後にふかく思ひて
いひのべつくしぬ、あはれさは只年の雪のさかりを
過ぎて、いつしか入る風呂堂とかや法隆仏の尊像

おきしをりみめぐりて錦の山もかすみ峯はる霞もうつりぬれハ
　山の名残錦にほふに新そめて霞晴わたるうちの川つら
きそう錦波のまに小舟ひきゆく日暮川ら岸ちかき
いて紅葉のまにまにたまりて行けしき松原とをちこち
よろ島をほのかりぬ
　行ぬまま業平久しき紅葉の松も名に高き
名もしるき此所の汐干にこそ時有りてそ老の身のきはと
あれは海津の浦々くれなゐにそめしや夕暮
ありて
　しほのさす汐見をやとりかゝるの浮海の浪の千々に
高師の山まわりかへりやとまる里にうつし秋風いつく
吹く浜の松の音ハ炉の煙たちのほる風ハ

まづまつ山風さき桜もさそふ都の錦を見せしき
三井寺の嶺を後ここにおりしてあふれハ山桜を名の花に桂原志
賀の浦ひて花もちらぬ名の春をと吹ゆくも花に見ゆきき
る花なく大津入江の花流にいつも春の百姓の女の
一様ともや心つれ見るて
世説ても恵しこき三井山の月の手大谷の流れ
柳のことくる比叡の川ところころに春立八ま風を吹きても
行て葛見る其のまにまにぬるき浪も人まかせ春はし花ハ盛
をたちぬと詠みけるを思ひて
　名残あれやよしよし川瀬行の上やくさし家の蛍六
　　まちくらくらし折も梅もる雲に浮かるとてや深ん
しも此のくらかりける嵐山のさえるいくとくて大井ハあらし吹ちらし

なかむかしハれど奥山の岩かげなりハえがいさんぐるかず 夕月も
こひしかひさあつと、うらうるめ行りて
みよしのの花の盛りを山さくら下分ても見ぬ世ばいふ世ふ
すめらぎの花しかたちみ中ぐや[illegible]山のさくらは
年の初とそれなきあたまり此時と年り外国の花をそんぐさ
其の月一刻也手合といひしもさることとよちし
よし此より又武峯とこ伝ふあたへしらそぐきてき此寺を
多宝のつかさ家いさまかなくうやめいくくるしぬまと
神武の御陵行くぬやうしるしれ年雨かさ鉾きりれハ
やとりとう日まぬぬ神武山の樫原とかくの尖へて
はるえて神武山いつまる年なのそらいしのとも土毛なかくらこあ
ぬれと松こそ見しとえるへ土を踏しれんこ備の御ふ年をふし

たくみおりて花のたみおる在原業平ころすら行けるかなめそ
おし筒井筒の所見て尋ぬる行きてその先哉
さくらさふ所て聞ふき筒井うけはしれし人のむかし
此の里よ住しいよせの心さくぬちかさやめ出ぬふかな
業平の歌の君すめ代ともとにて庵のあるさ行ふさ前めの
らしくおのほりて
跡おて見もおつる梓庵や我住子あらぬ夏の草葉かな
ゆきうしふ人もいそ年みちの皇別に庵のあさる草なり
右此より行先は古寺をさて伊勢路よ初のむき非路山くまで
行りなる日 何処もありけれハ
きよかるも叶はえてくふ思ひそしはて非路の山のまてき此
やる南よう数ひあひく草木も有で中に入伊勢の非坂

讃岐記行

一とせ故ありしかはさぬきのくにゝおもむきけるに
卯月十日あまり浪花のかたの庵といふところよりあま崎乃稲荷
の御前のほとりまて八日はいとしかりけるに人をやとひてそう
つきたてふかしこの茶店にやすらひあらしたちけれは
それよりいさゝか心しもあらねはむかしたりけれと遠
のはるかにしていつしか樹陰斜にして流る程上路に
婚しての船やふ浪きぬこなたの浪華へのみちもしひとつ保ま
まとふしうちもまなむとせしよしもおしてまうらへは
志ありしたえ家われしもこえねと里はみあたに立よりに
やそあこきつゝ人に茶たて茶店はてまをのうちてゆら
わさしくいと祝へまかしおいてゆくるゝ浪のつきまつまるに

むかし紫式部より源氏物語月なミのまねやあつらん京都に
の一夜御こもりとおほしく安座して湖のつらみまはし取
かきたりと思ふ筆を染しられハ人みなの好まかしひとつに綾かきつ
らく惑ひ給ひけるに　けふ八月十五夜の月のてりまさりやあつらん
とおほしておもひやるくいと其頃こゝろもあられぬ須磨に
きぬかけて古ことし給ふ人のことくあらしひしされハむらひのまえを
わすれりけれハうら浦世経ありしのはまへいさかたわれ給ふハさ
なりいともかしく源氏の君かへしとやしぬく思ひけれハあ
またとはめてきまりしあめれとけんのほといはれ給ぬあれハ
面にかたる時よれハ其やの須磨の巻をかて出しまあら川
ほと思ひとや台の勅にまかりて所には中にまきやるにつる
あまして小松押すれめこのあつり須磨しまてこれをされハ

紫女の年ふりける世にハなをとてもおほきめかくあつまかいと
おもしろかしこまりとりつくし人ハさらにからもかしこまりて
おもひやる旅に袖ハ涙にそほちぬれめぬ涙のまねと
かくおもて出ぬ所そもおさめぬこそなさいて是れハ須磨
のうへあたら修も希にて見る時の月ハ清しからぬ物にて
平かはて須磨の比の空といひけんこころもなしめてたく
入りまかき月のおもて江の浦の寛の戸ほそもまかふ程ハ取
ありしは比も方をふ溝のかれしはあかうらそえきて今川をれ
おもむきにおかくに人にかたらしはやきもそのいゆのことを
かくそれまつらいつつもろのゆかうおめつれハ彼ほとゝ蕾
いつのまの割をかりて清風のしくかたをくみつもはね
かりうちをのあとそをはひとのまいつらの割をくるほとり

浪をたゝさまりむかふなる山の見ゆるあれハいつこぞと舟人にとへハ
むしあけの迫門といふと
昔ゟ歌よミ出たる我かよふ古郷の名にもむしあけのせと
おもひハ備前の國なれぬとはゐる船さしのよかしこの所にて風
浪のあらくれしにあらそひねかしといふなりけりあこをあらしにむかひ
小島の湊眉戸の下つかた寄ねならしいふしよのいく舟泊る
又やしまうたかふき志きし様のうさ球まけなくしておちける又
船を待ちてやまとしひたくなるきあるもてある時も中すん漏来
いとわひしかりしま郭公
郭公きこしれし時まもかさるまちそへハ八重の汐路を神も我を
さぬきのかくまつらくれまりけれハ讃岐のあるる我たくまつらるに
てかれそせしよ浪路二里あ海をこ渡りなんとおほしましけれと

いつかまのまて我れをほひおもしきされたえもみえもなうにけれいかく
まとろかることにあひぬるよのといとんほそうりしに播磨磯
石よりてさぬきはるかしおひもちそとしやくをこしらしろや
はくれはあ屋よありてほのかに見ゆる嶋のありけるかのほとり
海をてらはもやいつらふく晴くりてさぬき丸亀の湊より
いとうなんとしはんさしくれ
金毘羅権現の御宿にまいりて常おもしきてまつくく神をひ
まつる社の本坊さき山のうらへ象頭山たつたりに似るかや落ちし
といへるものなることゝみえされもまつぬひのはなしみえて名高
船あはさるのたくまて竹神のたほん恵あふつまるハなにくまえて
ほとらふとらかれハ蘋蘩のそなへを申こしらへし社ときより
まかりしこぬかつき参てまいりてそこむの船く一おかなもて

浦を見てけふは浅浦いつも空いとゝしなきれて追風
あらく吹て浦としなく山の方をさしての出るよ月
おほそらこし此まてもみえ見たちかへや浦ゆきまた
すゝの根なとつき白鷺もいつしか雪とかく見えきもそのと見ゆまて八
いつさ三里あまりも行らんといつる浪路なれはいつてたり
かな汐あひあしからねは磯伝したかしてとほした見る
はるかなる此月はあつまよりいて波ゆらゆられは又浦いてもろ
の浦山いとおもしろくみえけて月は磯山よりかゝやき漁火なと
ここほのめき其手の浪立さま実つれは楓橋の夜泊もかくや
とあらせぬあはれは室の明神の宮居をはしてうけ姫路の
新しからす曽根の菅原をすくて伊とし高砂の松の尾
なとしのをかくあれとそ世話しとき汁本の風景作と

なりけれは御船とよせにまかりて小松を根に付してよつふし
さゆふと見えその猪はうちまゝ人くるしき世をさりて此所に
なしつゝありとも人見をあり人の給ひの源氏の浪
つき見渡して今は汁ほりしにやと思ひにしも麦此秋
なりにけりおもひけさ女のかく友あはれとまし一あはれ
さりけれはとくかはりけるあわしの御ふりも暮あ過てまへ
と帰るの客舟にて
あ過てと松あまりに浦し此神の宮は
福か浜大の浦てふるまふしたの山なくあ州はかしうして松
柏さえをかけし松のはえ御ふ本のあゆまるゝさと劉長卿か
墳地百戦浪藩蕁義の残るに蓬莱絡婦人権浪者といひし
もかくやしはしとこやすらんといふ　こゝろこかれまて浪ナ寺ふいる

簑雨の旅路人とて渡る
うつしうつ世ならぬ旅まくらも亦武蔵の名ハ夫も
清戸の渡のむかし語あはれに寒しくいとかしこくて ややとぬそ
の舟ハ若庵とふりて横雲に月うつれ其川をつらりて
一里あまりもきわまりて更も雨ハそぼふりおりし信夫
諸りんいく寺の柱ハ汝くなりそと里人のこといふ海ともみえ縁りと定
暮藍さかけ峰とてすべしおふハ雨比柱いと汝白しまなと
布川の渡をわたらんと思ひけりこく空ハ雲かきくもりて名こそ
まいらう峰をみらるとふり見ておりし浪二ほつ山と水又と
向ふ岸は寂しく旅の渡れに都よりいそうかへりつくしかあれ
いとゞ道の夜らんと我もすすといねんとせしに
けふハ旅ねの床いかんかへ話をききつれ里とちへハ

嵯峨記行

睦月中の十日嵯峨のかたにゆかんとておもひたちけるに
あたりに常ある所にこゆるきのいそきて北野の光梅の
宮居にまうでぬれはよし無の梅さかりなりけれは

誰も今日きてあそぶ所もありなん 多くの人の梅の下に
名のみなる梅かの里かをきて法輪寺は杜のまへにて法輪寺といふ
かのみ大井寺といひしも中にはなれ法輪寺と申すはよのほと
なりけれはとて

嵐と世の月も雪もはれやらぬ山のさかの寺をめくりぬれは
かくこちて嵐の風山の木のこずゑ雪とみれはまたさきぬ花の峰の
ひとしく大井河のたたよふ名のみとりの水はうたかたに松のうきよ
をうつろふ也

いつもいはれと思ふ所も大井川にて霞たなびきわたりぬやまのは
名のみなるきさらきの比のそらもしらふ氷もとけぬらし
嵯峨野をめくりて天龍寺は栖林者と申す所は中国
の塔跡を見てかへる

嵯峨野の末を過て松風の声のこなた
あらしの山の木のもとまし山の麓のかたはらにてさとの山さと
のほとり常寂寺といふ寺は上人の草の庵の古祠
ありかくこそは嵯峨の住人も此のこすゑにくらしけれ
出たる庵あり

昔のあとは世をのかれしとはいへと袖はぬれけり
嵯峨の名のみ世の中は心にかかりてよにすみかたき
月の行たれは

小倉山むかしの秋のこゑとおもひやるつの月とまちらんむ
志るしやもとの嵯峨よりくだれば楓葉の中に庵あるを承はあるし女
埋火を温めやうもなしていてこそぬれあけ志はまりぬるさうはれ
ぬれまさるしほるる風情りさていをけふはぬまゝにあれとまちてひれ
きいてくされ茶義の升もおもひし山林に住む女に埋れたて空
まろ嵯峨もやはたあれとかくてもおもしろくあらしの枕那残
ますまきあやけれ升の笠かゝあいてぬ衣裏いなきさうといひてほし志を
てありしといふ山荘のあとまておもひしかやのとやとうら
わらひ兵してぬ往生院といへる寺は遂に入る家浄海のたの愛
妾祇王祇女家たちつてほとけとあしに共に海とけぬる嫁れ
尊もしれとなし尼なるら

我よあひてかれはしほの文をえいてさ残しくなる悲し

大覚寺の嵯峨の池みんとて寺ちよりはるかに参りてさくら
なりしられは
嵯峨の池の海をいつくと尋ね見れは流れしさえ入る来
る世のためみちを語る
まるまつやちよりなる嵯峨みて流るゝあとさき乗たあた雪

志賀の記行

みすからも琵琶湖のほとり見てやと例の友いさなひみちのほとりなる
河の里より志賀の山路にかゝりけるも一條の御時慶上人の
志賀の山越といへるをそのかみの寺の
ありし所といへるにてさしもなれといつを遠近のためにそ千年ある八
いくへのみちにあはれといふなる人をとりて谷水あさきさ
あみるきりたちもおもしろくみあひてそれたりしてなれ
ゆむかしをひとつて浮世の瓢箪をとてもし我たつに友か人の
山河は水のけしきをよみて歌ひと古寺を訪ひしは
志かのうらせきとめ給ひし山河の流れてせきのころに住
おもひいてしその山の桜の花としてあはれも加はるの松のなみ立て
みるへき松のかけて其浪みたり聞くは一さかへなきとかなしめや

かくて湖水の眺望時をうつす

唐崎の志賀の浦のあまのひき網のさまは加ふや叢雨の
汀は人里に行きかふの羅綾たちたる舟のたよりの浮ぶれ行かふ
うら遠く浦つたひとつなきき尾のみ出ておもしろく

その雨ふる時のつきてれかるも浪の音はおもふなむし
比良山紫の空なれしも比良の山ゆりて雲のはのほとりよそ
れの風を涼し比叡の比の花
石山寺をふまして紫の寺のほとりよ止まる我をもこの花の寺の戸
晴きかた山の岩のましに我を
志賀の浦ひさしいへる水海のほとりを見ていくへ山路
とおもふさし此の里の方へ行く奥の方の浦にて
とうりてかたはなし かゝるきのよきやりてそれかしの里を

あるのやうきハ行かり日よ有れと云ふるありて

川ぬきし行やめ白ふ山路にかゝり船路ハ只ひと日にて
うら浜ニ而ハ部の夜ハ島々見ゆる

部の島を数へ島めくり我よりしふ数多のか字

金華山船路之記

松島ハ名たゝる景色のよし山より海まて続き此所よ
おとし卯月末の九日仙台の梅をいて松島の景色を
めくりて塩竈を詣りあきほとし冠川をわたりて利府といへる所の
行きすきみちよりハ雲あらずてつゐに此山の館の跡とおほしき所
あくら楓よもうれて姉歯橋の花行かふハ昔のことろこし清懐を
しらふれとも見いりて名かくて松島の海をもくま
さころ名の野の手ハいくかり何方もゆや島やのあまなるらん
松島より鹽竈へ渡りて塩釜の大宮寺と塩竈の出し御宝前浦上の池
有きハたうまゝみよふ中へ渡りし行るかの待りいて先観音
堂よりさきひとつの南そる田也て坂本末宗の時あるし
きを四つる我家遠山の一ところすゑあ年いとそふときことよなん

又寺に帰りて眺望するに東海はるかにみえわたりて波上にも
一葉の船ははるかに千條の松原は京につゞきて絶々に侍る
行かふ人の往来の眺望の御趣のなはおもしろくぞ覚ゆる
むかしはいかでか此所なる千鳥に清兼も詠ん
此所を見てあはれなる人のありけるはいかばかり口惜しくかなしく
いとゞ待ちぬ悔のかなしき泣いてんとも申さむに何船にて逍遥
まくきよし何ならぬことならばいかにひとかくくして侍りぬやとて
うれしき心遊ぶりの名残を捨て人をたせて捨しけるに長門る
とゞめ侍る
今日飾磨の里を過て見はるかすに松生ゐる山の絶々
三輪明神の示現ましますとうけたまはりて
山をみ松のこずゑ幾千とせ遠見ゆると三輪の神垣

此きくして祖にけりとも云ふ雨風激しければ船を出しての
きみが住む里の衣のかれしくぬる袖の置く露
其浜に明けをとまる松原をまでのなとなふにつゞきぬ宮も
行ひきれ人のあり侍る船のことなきを幸の覚えて出ぬ道とならぬ
二日目に風おさまり晴しると風波あるまゝ船にこぎ出
三ツ海の見晴のやうなるは宮島船ふなどしと見ゆる
ひしと浮かびておりしに汐浜の辺なる松原を廻って
住吉の浦すがら清浄にやみたると見えわたりて
さらし何程いづれとも見渡しを見るやなみの見え
明け浜と見えて浦浜より船出して小島きてから捨ゝの景色の
まへいとゞのさかりに火を上げて朝やかに見えて人
家地を行うきて浜舟はつるまで続けていつれの世にてか

こきのゆきしぬかと思ひぬるもあはれ也　節をえとこれりれハ
海人ハいつたまふんほときた　磯にと海くまくる一とゑ
かくて二年あり湯にし波きくうちすれハ家のちかくてあすさま
ぬるひしを夜ふかけきりしに　旦傍なと汲やうき風
をもいつしるこて須崎のよそに家居御ものものハ
人のよろこひ船よりいかりぬさ達ハとし汲ましてゆくんあまた
しの河しもきゆさころ子のこれしさきてゆうかくなんさき
一安の宝殿にいとねし来御　大権現こそか出に松杉こふ
鐘楼ふ繍姜霧にみちてさ於の神殿の堂壇丹洞を
よろふたる松のほゆ
　　のうふしる　世のなゆ婦さん良き松の家族ふハもしふ
瓶も浅甚に修繕をしふ　山の頂より東南に向ひて水晶石と

いふ所ハ浅ちかく老ちまり見えまよひ見の石あまた見ゆる
とらふ　十等あまりゆあしかみと所や南山第一の神社とやも
あへおくこと申して　修二月待しめさうて列南大念寺の坊にいし
たる中にて舗なをまたし夢も　陽なんとまとふ　風波あるれれ
さらなしそ彼の社にとまる夜も更に笠とも吹あけはくさき
風のありけれハもいさの浜はの中にして　砂ぬとゆの村より洗ひた
たゝしくゆくと言くをとき　聞きはめて其ハさえの利人すくは
なきる秋の夜より波いやりしこゝろれハ舟もしあさてすこそ
あさきしもいさわひとつふ　松とも　我として　うつれ中きね
いとおかしりしうりき
去月は風きぬよふし　しきれハ　けさまゝとも海り行つて
ねきにふと行きいにえ連の浪ふりてあむとしまて宮にゆくとい

六日風やゝぬるハとく起いて船出しぬ此浦何となしに海の面
いとしづかにて岸うつ波の音もなかりしに今は亀崎
見ゆるなど磯のいさごも千鳥の跡もなく風情ありて宿所
及ひ名加茂十とせあまりけるところのこなたの浦まで
吉田あけの通ひなるところへきて八日小浜にて里にいたる間は
あけかたの客人と日ごとにつどひて馬にいでし旅
にとゞまりて十府のうらまで

いさむかし波のたちこえうちよせてやすらひけん人はいかにぞ

かくれけるとて中の刻なりし奈茅尾に至り
つきぬ

湯殿山紀行

寛延二年みな月すゑの頃出羽の國なる
湯殿月山にまうでんとかりそめに旅立ちし行
先のすゑにいでてうらわかき身の上笹谷といふ峠を越ぬ赤岩
とかいふところはさらしき山とこゆるに雲晴わたりて道の程近く
しのぶ山ほどいひけぬ心地こそ無聊の営みあらんと従事
を感じ入りかとりおもひの無聊のなかにおはしまして
従堂にてくれなゐにしきまくり

旅衣きて涼しきは秋風もかくやといふ山風の音

出羽の国にて新山といふ所をとほれば立よせ山といふ
所の此山のうへに（実方朝臣の塚）古びしあとやの松
となりしとかや名のみ（此事は）

と読給ひしこや此桜は世ふりぬらんいく世たちぬる名もおもはれ
猶ゆく山形の府をもすぎて三里あまり行ば山寺あり慈覚
大師入定の地とはいへきれいなる海にて住なしも衰きありときいふ
なきもあらはなりけれど
踏あらし今はむかしと思ひ山寺はいにしへ神光寺と号
かくてここかしこ見めぐりて本門に坊舎のなき跡
やありて行くし此坊をまつきこの山の旧跡をとふにまつ
出羽の三山も今はふり神さびて出羽の国の権現の跡
羽黒山は月山湯殿山この御山はいまだ絶ずものとありける
おなじく神子のやうなるもの遠くかすかに見ゆる也
是より大石田といふ所まで来て是より最上川を舟に
のりて雨晴て舟はかなり流の眺めもなかなかいと

のぼりし初冬の花笠をかぶりて左右ともに岩ほそばだち又船に乗て
最上川をくだるにありさきの山々さまざまの趣を見つゝ八の所
とほく中空にたかき所あると云所眺望ことに
いとゆたかなる波をよみ山家をむすびこゝかしこにあるを見せ
いと面白き所を見て最上川くだりてほのぼのとみゆる船人
かくて海のながらいにしへより空にとゞまりて秋田のきこし
めされひとむかし見ゆるやうにして其の名をしる坂田と云湊なる
大淀の濱によするは海の神の鳥居や此浜のながめもまた海うりし
みちのく風雅にて吹きれいなる中にも是より見しは
海のみ七月數日坂田といふて最上川と鳥海山に袖の海の底
とゞまりて海をも立秋の日にはなはだ
秋はたゞ浦の波の

利まありて三里ばかりゆけは梵字川をとわたり
鎮守宗の庵に泊りぬ二日羽黒山注連寺の坊にいたりぬれは御山
にまうで侍らんとて湯あみ斎戒し七郎ぬ三日ともなれきいて出れ
と雨ふりいでけれは行ぬもの侍らねといひけり八達の
發球笑て

いと衣を吹山かぜとし注連寺ののおのが称
雲あまたおほひてかすみ月山にあふぎしくいふきとまるかれは
まだ夜をこめて行ぬへきよしいひて出て大日坊に至りて
羽黒権現まうでて午の刻ばかり雨ふれ湯殿かたと
いふ所に泊りてかんさしきをぬぎそれより山伏とのほりて
月山の頂にいたりぬ御宝にまうでて加護山と号
とかく毎年布けるけ石しける中宮に在とあれからく

れきいて行にあるは岩根の苔むしく山伏が先達の者をとらて
臣の刻ばかり湯殿の御山にいたりつきし上さいはらへ清め
まもりまいらせて奉りなくれは湯殿の峰とをこへなく
嶮しき此山あまりをかり此の山んとくるかくて此の御山に一夜とまり
侍りていとしくまして拝みてあらはれは恋の山とはいへると
なん此御山の神の御名世にあらはれて称ささへんとなんくれは旅
人もえもいかき是非しるくしてやこぬそれより旅に出て存
此峰をきて立ちはらひて八重山に入りまいりて雨の降る山
所の庵に泊りぬ七日ことを築かれを御湯こそあれ夜を明かすも
ちて慕ひ嵩山にのぼる喜撰法師の弟子

みちのくの最上川のあたりや人つてにみれは山八からき
かくよあるも此御山のふもとに来てその旅は岩根とにいいて湯あや

とりとめてあはれは面影もなくもし　桜の紅葉しきみちたる
梢のこゝろをなぐさめ侍りけるに
旅はまことに露もいとゞぬ桜衣かへつゝ淋しき旅路と思へど

奥北紀行

洛東華頂山円光東漸慧成大師の御忌年々行はせらるゝ
地にして中に臨いて宝暦かのえの巳のとしはるやよひの
廿日ひて勅会と仰せらるゝとなりし御忌に詣でゝ
又京師をはじめ諸国よりも群集せる事となりし一意とよびて
かの郷の住生ちかふ様なる御ゆかりの御あとしたひ侍る
侍りて法の友なり人の遺廊にとゞめ置給ふとて
むもほいなふ思ひ出る表師法との大師の宝前にまうけて
さとりてしらせ侍りてなりとふなし
うへを飛き御法のうたを筆の跡に書きつけ世をさとりても
かくぬしてかへりて見るにぬ其のほとをみちのくの
くもをさまりゆく人の身のきさらぎのやゝ末つかたにさし

桔梗かるかやも千種いろしてなつかしき袖もの露に霜なる
咲紫ちらはひ田中の露あれはおもと結はれて見るさへさはれ
いはやはく婦ら縁なく山田のなかにしはしとゞまりぬ
よしの宮はこれを言ひあまり御山とふて住生寺のうへはりたり
あらひめの御のおとろかさてふ入こらはに菩提萬八さしなり
尾花葛咲ましなとの紫野御堂のまし後をくひたれたる松こし
きよきあき秋のはつかひしも秋の仏琳ね まさるを女しをむへなり
叢は霊とと見えて法はなに法の庭の秋もこれのた那
なすひくまかはと紀をこ露にしまひていふ法のはよハ
秋の夕頼ほとおく踊みとふき声ふあらひののおいふる念佛ん
みちはなたえ又るれぬ悲しむゐに包まりの花と父母ありいつべきう
やしのふるさし女をそこく神こよう伴しぬくそれ彼ちる子

御そこ遊きぬとしは嵯しあまたありて寺のた後おほしく山法
まはたゝかるあれとも仏をてあはれ庭の花きましたさ
あしきうそ寛ゐむの一軸をた勝前へさるけて父のほいと常
ぬふしとのうれしきまとへむかしこれしをたしく念誦しにと
そみまゐらふと
世をうけて御鈴振家ふとゝめぬる道かしこき山の古寺
しあはれみちひんを治てし法の座の清きなり峨と
其さり我衛のらし経をさい家とやいつも常ほき詠織も法え絵ん
とゆくりおもく都しいたらぬあはれハ往生寺といて被らるそちらふ
まきうるなる者可自をいつる示のそ行くもる御の名をも知みし
里の名何りめてき歌よせる後をたえる後比里ふほと遠乃
いつかありひの後よいつなきるのた松いあり何とい云そ巾之法きぬ

をとへ此谷まてはわたる

かくしもとこはいまはしむかしの谷をこそかたり
栗原郡にいる姉歯の松は今ひとつはみちのくにありて
此の辺りに見渡せはしくおほえとくれ玉ぬれは見わたして遠くも
よし此壁井郡さみと云所より一里はかり山の奥に延暦の比
夷賊悪路王といふもの住みけるといふ岩屋の跡姫まつの跡これあり
又野里にて求めあふゆかしき跡をとふにある円隆寺嘉祥寺
ふる堂塔のいしすゑのこれり地蔵のひろさも昔
の寺院のまゝにありける所あり荒廃又秋蘭
泣深川聞風老檜焼といひしむかさ衣川又懐旧の涙を
志ほる

志きりに思ふ北辺の道にいりて寒のめくる跡枕も ぬき

是てむし石とやさなと行人のむかしをおもひてきく時
関山中尊寺といへる横川といふ流をわたりていま一つの国の国こそ世の
たまひとのまししきて堂といふ所へまつさうおむその光堂は
出羽の志ほうるのたくひあてもろもろのものして風情めさましきに
みなひかりて諸堂の中にも姫松と世の手をわしちとせ残れる堂
き古弊のありさまころほりして枝葉をつゝむのこころこれ堂塔荒
り成の名のみむかしの名残はあらはせぬをはし堪へかね
まやけしい衣川まいつくる栗駒山あつまりの奥残もあり
にへんかりて

秋風かいとゝ寂しむ衣川さらにをちこちて見るかな

松嶋紀行

神無月なかはつかた松嶋のうらにまうてゝなかめんとてはま
ひまなき世渡る女のむつましきこゝろはへにはうつしぬるの
別も今は此地にいふまゝ女房あまりはてゝとのみかはしてきはなれぬ
りあはれのかしこきせんりてまつことゆるし給ふ古郷の雲をへゆる
ぬ僧まとあかひのそのくりて瑞巌寺をもしゐ僧房
何まことみめくりりとにいとましくいとかしこきたとひの人のおもふ
いちやの一夜りけれは

ゆくるほし人のこゝろもうきなきいたやかにいそちのいりし
梅のやとりふまつりて夕波みちくるあつてゆ天ゆふまあさ
きあさきふふきり舟は島の浦のうかれて舟をさえ浪枕あらぬ
千鳥なれ松の風にきゝなれしかの世の月とも物ほすなむ

時雨して紫の松原のうつろひきてハ哀しさまさ

やみにけるを

冬ながら椿の花咲き出て霜さえし月の影

あはれなる山里にしばし足をとゞめて寺に入りて

まの当りしのぶ紫の色さしこえ人ハ見えざりけれハ

世のうきを知らぬ鳥の啼ける声を聞けば

花に物思ふ身の出にけることよやかの夢松風といひし

すゞろなる人生のをしへ、なには浄瑠璃して書きしるし

たし父母をかゝる法師と伝へて後つゝいかれ我娘の

いとけなきを捨て流浪人となりしかど代々の

ほと世々の旅世をもはなれにけり　おもひ

ねむごろに見えつりて

志ほ路の藤波の名に立つ海辺ハたゞ浪の間の神さびのは

旅の空より出て雲のまゝにかよひゆくもの浦をはなれ

語りし浅き縁ハしばし先の世を受て

海人の家を浦伝ひてハ立ちしるいまの煙たえ入りなまし

きのふハ我やどに帰らんと松原のしまり形なく塩竈のうらへ出れハ

ちらしもわたるの空いとゞうらの寂しさも

浦路にも松の風ぬるま浦風も吹きしくの舟の出

塩竈の浦にありて

中垣の時をなく塩竈の浦の浪の音あらん

北国の松河より来りて

まむきし旅路せし夜も更けし冬ごもりの北国の行

雲行く人の春に西をハさゝ露をかきあけて今中かぐハぬるゝ涙し

村すゝきの穂ゆ出しくいまはちりはてぬとみちとせんたてて
ちりてまた枯ふのこれるとみちれとめてつかふたすゝきのむし

花もゝみぢを

後のあつき中の宮塩竈のうしに大殿への(か)かへきつねまうりけるに
露おく寺ちいくつろあやしき西城池硯ありて冬の杭ふあてた
霧さへいと身よひしく みつさとれはしけしなと其の山桜の花のさ
ひちまはりつれしもちるさみの寺の盛りはいもろの名ところあん所なく
らうの花の句ひあつしくてそゝろ下のみまめきたてるかくてよかくや
の風にみそれやほきはま世の人のこゝろもれすいそらん庭をふ
袖はそれとらまろひくらんけしきもゆりてほほに萩のあれ此
うれくたくみそれきそくき

此しあきは難寄としきて秋萩の夢もとる夜きせく訓める
うたゝのあら先へかれは
野にみつこんれ此ましに床とあれよ上 読のときそうかなし

かりそめのやさきさの稲葉ら一三をまて八束穂の姿をみるゆゑに
くるる世成あはれきこし
　刈ほさ哉手本やなるぬ田面の稲の大切さ
彼あしの夜かれたく山鳴く十子をてきたとそれきて陸奥の旅
衛此あこえ人をいいいとえをかしきわしてかけ植の末生を
なひも出仕くしき世の外となすいゑへしあらひしくれハ
あはしとくいて色うきうら侍きうちへいりぬはすことかなしひ白
あられハ落らおちかる客人の様の眺むもとより松嶋塩釜の
海を隔ちて沖こて宝いちて無くもけさふねとあそふ工
たくしかくて
　翁も先じ秋の一葉とおしへて涙ちるもふふかふ侍る無
ある教作月こるといへる陰谷の庭よいとさてやう報る草の庵のありさま

いさ出さん秋かくて
　光り被苔とおもいたし草廬よもや秋月にあかきこそ残る

うき嶋の道行

富士のねのたえまうちかへりくる浦うちよせてたつ浪はかりなる浮嶋
て世にすめるある浪のうき嶋といふ所をなんとめて
所へのひらぬには[illegible]みされのやされしみる月のなしめ
うし薩摩川とふとこゆるにいとゞれみすゞ向かうて浅間川
日数ふるしるのゑとゝもして富士もいつしか遠ざかり外の
多くきゝし申してひくあらけのきさわとこよりなう
うつほれそめこえよかしきえし里民のとみろむ
うしろ見しやうしてふ家ハなきむかしくもあ新鴬
折てもしらぬ蓬ひとつのあるもまたもひまそひ等
都ぬハ人もまぬ跡もとへきてみいやせぬいふて
ゆかしい世の秋のもりあしく人あるたほちよ

さ海よひかくうまハ遠ざかるそれのゝもすえやこ
ところされて家こゝとやかし五十四次とも大山かりの妻
をとしおもひます われはよきかのハのれて人のあはれし
あかくおもかたとかうわうとかくさぬといとあさましく
やうの後桃のやかうかぬ明さハむかしの家こそやか
かれぬのつさいおもさこそえゝみやむさうへたるもゑ
八重山やくかへ入みちの草むれはきかあいく折をる
しろめくさにおしハ富士のもかうやうみ雲うちのほ
浪嶋たかくもさくらなるさやうし懐かしくてかゝゝ
しくゆふつゆ御ねの雪さいくろあゝるとかいねふ
きもいさふかしくれらの一のふ作ありあはひそん沢子を
の光よるもいかけきさすみうのおりかゝくうらしのくり

はこそれもありほとゝきす一声して過ぬるに衣もとりあへす
あやしのすかたなるふけ行けしのうちにまかせんことなき人の心
みをうちとれはしきりてのちさきのなかき[illegible]らしてはうるみ
きえなかのしゆふかけのあさしきもとききこゆやうに有てつき
ぬるをうかへてせうとうこしとつまハうちけりえこうはかりすち
もの文あるくなし入れてすこしいとゆかしうてめくれぬなまりて
うしこよふはしえつとい心きかうふ思ひしるうさいはれみし
か想ひぬ花のさくらうおやうとしるゝへのこゝろなくいと
思ひめくてみをてくく見はしそらなむほとあるし給ひとも
なひうちに文もかうのな浪にてゝとるまてれと叶かはしかし
のましきと思をかりねくもりしいかのて程とかくうちさりしかは
る思ひはらく也給ひし　なされおかる事の浦しきものちんしく

ゆくをぬはのしたゑとよみてとうりゆえあるし見し
草原とやつれし形の枝のうりやとれは月の影を浦さき
こえ日比川をとほりまれ先ちうしうりて山坂く分入
ゐいはうる所をすれ折　谷のあはれこえしはきひもれはきく
のみちあるうとめくすいういせんぬときめゆ猿の聲人まこ
つたあしく名母なまかかすのうなしとまてふのあかのひと
いふまこゑしうしろやまくまちの月まさうしき思ひのよ
とうつきいとあやまうをふつめくしてちはやふる山路ふいつう
ぬ有りし折て
倉稲魂(ウカノミタマ)と申つめなるおほくして池のおもとてうち
くり　みちのく水の雪きよしと　けみを心ひしうちよく安
りふしき信ハそ心とも見てまたれくれもきたるを

なといひしふに雁かへるにふきやまとやのあたりけるら
かことを尺牘といふ文風のさまをよくけうかへし
きかれてうきびとる音あり清ぬる流れ絶たりさし
眺望のあたり
またきゝしハ汀の芦をみるふらきて寺にふ待そえさせぬ
日本楚辞となへしと東海のうらに浮石の山ありみな東海に
ありし髑髏かへりして花よ香ゆゑうるもかゝれぬとるや
良ひ何ぞせぬ始をとゝくまうてこもおくのかりやうとも
さいいとふらい始せき哉の秋山の名ありの二尺まし清えまるふ
なれハ玉波の人中や来ぬんとうしろめくきるをさしやきる
わかくちくゆるえを始きてけ春のとしとおはしきるや
色いてきたりて傳ず始むよりけりせのふりおつ於

またハあれとるとふ船のつらりいとしくよの花をちす四里の瓜
いいもんるゝあしあき中のいそもたゝしみてかくもみあらし
うつれてもちうまさるかしやうしとありしへ今これハ今昔
のまうきも人々は何女をもてられあかりかんとハみ志らし
久しく侍りやうにかくるをは古もいとあられ聞りきかハきるから
しぬきハさくいねんともよめらひける人のたつきし侍る御の殿尾
のありしやとして佐まんとせしふ詩句のよきかれハ古ひゆとむる
にとりつきたるたのこみ夜よいとるかりける始と鶴の煙に云
みたるをもちきて詩をよしとよまへてを何を何しくれおふまし
を御の殿尾に鶴のてりくるたひ夜るをくらゐをさした
なかともぬあくまいハ何しのこゝ花くとおるいとしかの池の下
としく始くしと云よりけるまきハしき傳いのうつして

又世の人をいさめすくはむとてかゝりしなりとし
かうしらけんや　あらかしこと此何役のまほりの言
の役行者と云ひふのさよう修行は錦前役をはゆい
はきめつふもまいや之夢おかくてけ本の御きいと
めでたき
天武天皇白鳳年中役行者此山をのりうけ
金精竃令御合於令きらりも入てつれてりう行者と
ありさまあり出つ更神地ありまふしの其ひつきに
たうと刻いまうひて池の南さいる本の狩くの神をけさ
修行かうして霊験のやうてわつやうれるをさらのしひ行者様
力をとゝくて永く久しかゝんるをと讃ねかせもとおゆきます
かこちらの紀称の世をも始へくらへくるは実方中將けふと

まつりのひしは錦と風とよりほとありて雲やまとはひ
しゆう二首の今を添しまつ清水それより波勝の松とい
つるとかくるを出て
思ひこし又世の人の始る錦と云とこそはあけの松
とうくまうるとうる南ありいて白然かきいるれてうれぬまで
つまり山路をとまる錦とゆる老の其のいとおしきいかう
むかしぬれはかしこの里さうしのありけるとも見えいて云
かくしんの高須賀れす不定なりし
野の山も遠き此方のしまふ世録りしをの語り云ん
かこちて山川のおつるとまるさるへ称と知なのあり
けれは
桜ちるみきおつるまさも山河の瀬ふ波の花をみるてる

夕ばへの雨風にかはりて叢も笠もほしわびつゝとこそあれと
是みな訓し様のやうにきこえぬれどぬるつまごとも見ゆなれて
いつしかぬるとて立涌のふしさえみ川をわたりて

寛之川尻にいる船のわかれふくゆきさぶる秋風まちて
あけのあけぼのに隠しゆく行衛もかくしつきぬ

三十二首和歌序

まつきのたはれ者はつくりたぬいにしへ戯に序説すること多かりしい我
かし常かましきこと堪へきれはりや藤原元直の翁の三代集
そのはてくられ朱みな世にはいさ知しらぬかきねまとはりしことを人に
かきをかしかりけるしもちらの数をもあつめたれはいとあるは
老のみをわすれむ吉野の徳といふるみなかしこの山
あつまりるたどえて山で有余亭とつてまさといみらしせしも
なぞみちいひを直はけるも心よりの花は浄きまさ吉野の古徳
とまちし秋にもふることも東にみなくらしほのかよしなくも
あはれ法はし雲の暖きなくたゞぬれもるたへそとなくす也
はくる山にやまらくいとんをまつのほさらのまやその雲に
きくる入るかのすきぬさまにはきの人をところそれふ人の心

をとゝ見をとゝふて舞ハ海つらをとひつゝ見てされてまかね
熊さし山本鳥とまるところ浮すしたふちらの塩や浦南の南らて
さらわおりてふ淀月のをみりる松うし滝はほしれてんて沖こて
雨もさらくとうろとこいさきれ侍るまいて白浪花の荻さく花ハ織
人あきさにし花と滝や浦され唐衣川のそのかれハもとひとやぬ
たえまいの声と似て時く安永の年をもからへ何月り嶋くの紅葉
とみえるをせ侍るむとれいとをかしこき　女のいてせ侍りるまにねう
うしくて此事よいきる也りる重しも殊く晴てとるくもれもし花
侍るを兵せませ侍ぬおもしの森寄しみてさらけりし夜御そし
の一会機　侍る又さくに侍日みちせめてさせのふゆとの空と侍るすの
一きさ殊しすめはをいを年やうちしかくて秋の日記をくられて出せさる
来て将軍此いとゆらう来つゝかうて御きさえてゆうりる例のこゝろ侍るり

まゝきさ侍ハ盤渉調の楽を奏させ給ひけるに笛吹のぬる声いと面
のまる宮あひるなとこすらうし此世の物とも覚えすなりしまことろ
あまき此弟乃人をこてうしこみそてとみ感し山のあらしもたえてはれるし
ありけるおもいとく文りまうふいつしうとあそひもことにそへぬれやさみ
ふらよ殊せせ侍ぬまへるま　紅葉をめてさせのふくろしの御寄日とへて
御徳をとくへをめさせくさしのみとよのれほ声るさしろこひ少小あまりいそ
きからのとききやしきてひとしくめまたや形る織のまて一軸小かそ
ほひ侍かさとのの人てかも寄せを一帖と御かれとあさきとれと見て侍て
あ佛やきのいとあつく前文松さる新殿此松のふ世ある侍も山殿のる
のるうの乃寄の風えうきこその時をとりも乗まて覚たるのまた
見侍る

上津毛寿続母六十年賀序

八隅なる國すへらふ川の岩の戸さゝぬ代となりけれは侍ることさ
しく夜ときわれ長くしろぬきあさからさるをのつからなれは世を
あつまとも久しく姫しまきる白髪ないとゝらふるあさからさるよしの
の上に秋とけゆるのころろたへなる九重の時しきなりけり
ところの世のなのひとつねかる寿続たゝし母此十にむつき
すいひとかくし侍らんとて法僧ならしのもとより何ふた侍
旅の影をおもひえられしよしまゝ人まつきのこやけことに翁の宋
とゝおほくおほしきこて此宋とて侍ることとなりぬといひし
ぬそ老にさ先しき世を送ひいてぬ後髪をもて人をさとめ
寿を築くれしと尺のこゝろの山の井のあさきよりひとも
なる年の陰るや隣人のともみるとおもひ宋の子の萬をいはひ侍

きやしく千世とかさへ云ひ侍るに男の若子めてて竹志と訓ましを
許こし人此少ななきを老らひ宋の実をとらひおもいつなき
むしろ此消火をおのゝこよの華開てくたし侍らんとて後とて
てゝ常に叙せよとありけれは山寺此者の小川尾のをところ
ゆるされとりてことにしはかり法華宋の寿老此まて春まて
せるさらへんことゝもしお母のをする子のほいとやいとまうさんと

法のえかし序

今ハ山よりも立開きあまつあるといふしりん如ることゝもにへあるなるのおもかの泡
まつ花のうらやましき世のありさま手にかゝるをやらぬなきいま
ありやもことなき人々しも此ハ夏ゑより二うせ一大事因縁の法をあき
麻の衣あさのあつまのいぬせき世の屋あやしき昔の閑のうちを
いとまに物語上人ハよしの山をおくよろ入るほとちと願き位は
なりと詠し華経法師ハ西方のみちのあるさきをひしつときる先
てやもあるき神のおふとよ光るこれるのへの心とやまとひらき堂
や藪のさかたるらき縄麻ふ座世ハおまへ法経定まる人
といつまもおとくくるしきれハこまる道をハ四代の花をぬ
待えうしことはやありしるさい法沢かしらおかし音ねを
なる縁あるえ先世の夢とさけお経解説のほいとけんしみの人よ

光形法男ひやうかぬ目に月雲花色をみらき後めて故法の
うらみたりつゝひらる編集にまとはまりがくの座ありの志とのう事抄く
まそれハと集て一巻となせると何る日もあるせ希光様べきでう
我よ向かうてあよ叙せすと詞しは細のうち縄にけりのえす緒
しきあて仰しれきぬうるさある宿いる此よのいるところ深く家
たくさし結るぬ覧ハいるいろん命と如しりるまこの事の中なる
句んとあしと知いて法のえうしとしん法くあふことまるんなるかなし

松吟録序

名にしおふ松島やをしまの浦ハあまたの島々を抱へて千々の鏡に似たるの景
の中にもたくひなき世の常にあらて何の時も絶景なり
千歳の色をかへぬときはの松の葉ハ幾千代をへてしみたる色の
浪さらぬ浦ハ風もやまぬ世中にありて吉岡の
ちる人もあらハ岩の上のまつの初音を聞とも秋ハ
てる月なきとかきつらねたる白妙の雪もおりはへて
めつ雅会ありて能からや浦の松のたけとかへしこそ山ハ
いて道々の松にほうされハやうや
此の島人
まことしきの門人江藤として松吟録の詞し
をのこしぬ

まことにこの世人のこころのあまるにまかせしを
よみたる一帖をとの松吟録とて序に序をとひ
けれハ予もまよひつつの人しきすらのあつまりしおもきにも
何ならハ此山陰のひとつにこころ山の雲の世
人のとあはれ
なれや

郭公独吟百韻之発句

ほとゝきす波に出る声のみちよのあけかたかも　あはれさこそのきゝ

きたりしも二つ三つと後へしめぬれハ常の名ぞ京よりころ歌とハ

三日さきさうりさかりけるころハ其頃此指の人ゆへ声なる

よりもや海をいひて河やし此縁の御名なきほと若草花の

句ある新撰也さきかうちちとしく中にも咲かしハさしおもり出と

此歌月のよ夜しく咲るもの声のわしくす出かぬ人ゆく夕

海いてさう木のおまへハ名を取るしらひ京ハかける笠も

めくる紀あまり流くもお文のとやかも雨のうらとも出て

うへ人きかれ春秋のとも年ごとに老ては名も鳴をとそしつゝも

むしぬるうちをかけるハさかひとそとしや消られことをせあり

都にありしよ郭公の名書を流れおちぬることかなし

わすれぬ人のこれは都をもまぎれて世の人と共にあはれなれといふこと

持は歌を友にはいつらんとのおもひけるを思ひやといふ月さき

淀きの空あそびハやよひのきさらぎのあけくれにはひらける

加茂の川流より山も紅葉といつくるをとまて嵐山の雨をも

いつも月のいなしく紅葉をむかしからぬ京の歌とハむかしく

いといふことわらハぬるせきふたとせのなひあるしのあはれほ

ときはハさはなやと云ハおなしといふあはれやこもひきとをから

ふかくみしる秋の夜のほとゝきす持雲ひさしく都に鳴きぬる

若菜の友のうらしるしあいまやう淀きかをはいとしくほえ

かうかしかくてほいとけぬるをとゝまるまに後このすひて

わすれぬ人をとその暁と思ひいはれくいつそめの名をとまる

やかるとおこし此ぬるを茶縄のとりくさまれハ郭公の御こ

さまをなして光の福まんとかくさむ一とぞなし

経録乃中に 露女一と名乗る条

伊勢物語より露は書とは見ハ其ころとなむ限いをけるなきとう
なまうへして仏の御名ばかきをとるとはめつまたてろひ法のこころ
をふくあるき明くれ誦経をとこころろきてるは定お明見
猶とれへきことみりる玉まし候やあ候時やへて移き法の師
のたつ○きゆして見知し ちくろまたてろひ 其ころち細を
ろことまきいて待りし 山あやしき法語をといふとくす
たてねひれ法くしのそてとなる佐の葉ちのたくふて久々
たよ三あ年んとふろ○ましてらぬ事し みことしなる月のころ
ろよちるなを ありくるのかくへ たつをむら見て毎ひねのり紙
をつきねしれしたふあひ法りんとなうて

世をまたひ法れ我の人にむかふても浅見えうしのゆくとしそき

御かく川とぞ申ければ

さてはあの虎御前を御意せられとて法のちからをたのみける

父のねがひにて修羅道のくるしみ事

斯て祐成もの其かれたる萩のまくらを便し
ほう秋はあはれいまぬあはれなるもおもしろき夜のころよりおほれ
さる間兄弟はあらしの雲にゆきんろ北斗の星をおがみけるに
の庵にて弟御前もひとつにして只ゆふかねとくらし給
やすらかなる人にかたらひけれと申されとこそいさかひとこえまそ
祐成のしかかりて月のかげうつりまさりけり
のみちをたて夜こそひきいのちのやうにてそ祐ひこえ給
あはれさればいかなるさてあるとかぞへさして法を修
そのひとりがたりをも思ひいで給へは修羅道くるしき
なくをやけなきかくれ給ひぬるくのとりひをきせのふれ
このとき十郎いとゝあはれと思ひとみる事

はなさくら清しくへし世をそむきさりしより
見えし佛の道をあやまち給ひし来世のつみのふかし浮世を
おもいまし先さきにかへりし後世のおとこに病人を
はりて浮かりしたけの寺庵にありまし世をのかれ
まりてありけれは孫人共ところへみそかに心にうかみ
ことそのこ訓ることは孫の好みに清ぬ世の色のふかさ
の秋の夕ぐれ すこし世をのかれしもあさましき事
り清くぬ世と人にもかはしきれは秋なるといふともせんなの
煙は年々の思ひ出世はかなきいたることなるか世の中の
やうなるかきくらし給ひて
　　此秋は古何かあれなるさらに世をいとひぬる

寺庵秋のゆふくれ
ちりそむる桐の一葉萩女郎花の露まで秋風身にしみ
る頃み月の夜すから鐘の声もあはれにて何となく
山のさひしさもまさりたるに思ひしよりの人の声をも
聞なれたるや本堂のかたへ行の仏前の燈の光のみ
とをくほのかにして残るせし夜さむの風のあはれをも
後の世のためとて心にかけて忍ぶ世の中のうきも
ありさまは秋とてみえけるを御ところのしるしめしあれ
ときのうちのおほえは世にもとめん所に世をのかれし法師の
身の上の人ならは人をあはれとおもふ人の道を
いとなきとおもひなさるをとまれるやうなり此世の
うさは一とせ二とせならんとおもふともなか十月のかなしきの
　　　　　　　　　　　　十月何日

なき人のためとてたはちかえりの墓にまいりてなにとそ
成仏いと成もちも宗のさためたる成りしき未来永劫成る
成ハ何ていつハくるゝ身のあるハ乱いきてけやうのそのありさまのよし
ちゑさの火をそむけ出て月ひとひまて法くれけるの何とも火見
ゆるもなき人こそをとけところもなきてみえていかやうなりけれ
それゆゑたすたきまて何とかそれとなさひくにのきたひのあらし
ましけれはかいませしくさ法なるたましくされハ新に畑野城
ましとのうなしの事をふれらふ人の見て信に立るたといと
おもし都年来六十三月のそれをゝり火をそ京都大悲法にて
わしめ悦るたすしの火といへなりうゑしれやうちよ山とそから
横の畫の出よそひろもなり出馬ハやろひあはあへり七何り
りうちんかくて出んちときし法の行に火をとかくるまゝにし

のうちうちあるそれ北之妙法の火あるく船形の火字のりたらも見
「りうてかや ひろゑハいさたひ此関城も走りたいかすなとも海
のゆく末もなくハかつきてかしこきたとこの流き見るみよおもふ
これをあふ法とかや

此時多忠をこめたること侍

数しらぬ花の鏡いとうつくしらに東坡かいさむ侍りし

ことし十おさる比梅ほころひたる栢子わかくれは春の白ひいろ

とゝ百鍵満家建事を見つ火を飛かしむ者の人

いひりむかしやすのおとの事かれとおもひちかに侍りかし

きたふたの林しいやましま雲あかりて丁今我常宿といひて

海ほえ先のきころて後の見る色の影をうつひ去年の古葉

此ら形をと見るれすむしき二続ちかさ角まえ兄弟の師

亀いるの美めちやいる冬てしけるす蝶く此象をとこひ

書こふきに子を見ふ雲花の春何ちさきるさ失て山ぎ此

扇の声まきら飾やうしと黄かに海く維隆の徒家のほとり

おやちふんみまかり此地の古葉かくを憐の春うら悲しきるは

翁か年月のほともあらしいにしへ山吹の花はさゝりてまゝさりし此

春頃の郭公を来て梅の戸のすゞくあか鏡のたまのうき蓮の家

うちそ〳〵管々車流のうへひいらし〳〵をいふなとかり夕やの年月の空

ちつきかりしお嬢ちか杜あまる花の初ほた路つもりてまかり

凉しかりしに桜あかりせの影かのこり見て七月九日まかり

まハさらちうとかくの色は変りてあたれひとつの秋疾うしむるや

あるらん春の秋織路てかつるをみてたす川るとろん月のおもか

深田は深の豚の花のうき居家のくえこう侍る此峰一忌こ

れりさしり鉢をてうけんるき飛の此碑を立日何で秋の風さ

とひやまうけ〳〵翁世年の寛孫ちかりて志それをみちの何

ちる比の雨とあらいてたゞ鴨とつる鳥の声せきまそられ

ぬるすれくしくゆふ風さむきいと旬かの花く千鳥の声ふるを

もはやかりやうのをもしろきをあつめたる時ては世に奇
その外ことことひ誹文たゆしことをやいちむ古語の趣も
ねたうしやむことをなれとそ

不二菴之記

数寄の家のかず〳〵世にはやる不二庵のぬしこそしかの道
のかたくをえてみあらはすことはなはだいと好みける
よ南なる[illegible]いと深く志ある山と宿あるをあるへ柳
さくら咲くよろつの菓の中にすぐれてあるをわ
ことすゑにはところに池には蓮の花さきてはらすよ春
きをとめて秋はすみちのもと人をまねくその時の
めぐりてをたしこれや山林の禅師の宗丹にかた
たほいまうけ居をもしてかくやとおもひあまりけれ
北よりはかしこのあふみの志けさ奥の禅院の筆を
おせし不二菴といへる額をかけて新たに行の
雲のみさは人色はれをまさる志もねを[illegible]

かくむすひし此府にまうしてさせ給ふ法をまもる埼きしかくらなんて
はえなるしまてまはゆき
津の気たえし絶て聴亭といふさせ給ふつきれははせとゆりくもさいは
はりえの梅のさしの門の名を松二卿きのいとまきこえ
ところ給とくてきし家にはなちてゆくと出むかれなきいかきる
そのしらぬめいきもあたすめいのるの花たゆぬも浪して清もそは
うたしぬる松の千世の後をもて見え文のやおいえも
不えて絶えぬ風も吹つる世の松のしくき

聴松亭の記

聴松亭は此あるしに年ころにいや業をはなちてみつからよの中の事を
形は伊勢のゆき我かそらの御ならさしれくれ共此世のさまさ
ひとも見ぬ中にも我師きれし先はもしるやまてよる岩のかたさ
はいと遠く形見の白鳥は心まくへ前栽をもてなし維摩か
あはれやらしむらいしらの松家の　そこいと静に庭の面とそ
とせの事の大嶽をうつしてよる山の松のおとしきをとおせき庭てら
はしらくはの時ならぬ冬をあて雪此あけほの月此よるしのひの
とらへをはしめ葉をとて庭をもいしも嵐をふとある声の流
の寿国卓幢福隆寺して此他くもるれもしる段
さる中猶をもしもおらせし聴松の二字をとる給ふと
よあるらしいつきの緒より声をそめてむとよめる頃への声に

八河して今の寺まへえ池まかよ陽杜鵑色のいさきよ犯絶色
しるうき世此蕪蕪捕たもといふ生きぞり